

当別文集の会だよりNO.91

H30・2/26 (連絡先・河地良一 TEL090-5076-2550)

2月の読書会は渡辺淳一の「花埋み」でした

1月は休みでしたので、今年最初の読書会は2月24日(土)、白樺コミセンを会場にして9名の会員のみなさんが参加されました。当日は好天でしたが、この10日間ほどで降雪量は平年の5メートルを越え、おまけに気温も平年を下回るような寒い毎日です。でも、春はもうそこまで来ているようですね。

今回の読後感想交流は、監査の久保義雄さんの司会進行で、渡辺淳一の「花埋み」を取り上げましたが、この作品は作者の30代半ばの初期の作品で、日本の女医第一号になった荻野吟子(本名はぎん)が主人公です。吟子は夫から淋病をうつされ、実家に帰されたが、その業病を男性の医師に診察される屈辱に耐えかね、同じ苦しみにあえぐ女性を救うべく、さまざまの偏見を乗り越えて医師の資格を得て、東京で開業にこぎつけます。しかし、いくら医術を尽くしても、社会の根本を直さなければ駄目なことに気づき、社会運動や信仰の道にも関心を持つようになります。

そして、40歳の時に、偶然にも出会った14歳も年下の若いクリスチャンと結婚することになり、彼がキリスト教の信仰に基づく理想郷を求めて開拓に従事した北海道の今金に医院を閉院して行くが、事業は失敗し、日本海に面した海岸のまち・瀬棚で開業し、かたわら婦人会活動にも精を出します。しかし、夫は急性肺炎で亡くなり、吟子もこれまでの無理が重なり、体調を崩し、札幌に出、その後、東京に戻り、62歳で生涯を終えています。みなさんの感想は、①作者は専門の医学知識をもとに、これまでの漢方医学から西洋医学へと変わりゆく医学の歴史を克明に調べて記述している。②吟子の生き方、努力は、誰もが真似出来ないし、すごい。③しかし、吟子の前半生の描き方は丁寧だが、最後は急ぎすぎたかなと、話題は尽きませんでした。この本を読んで日本の家制度、男社会など、色々なことを考えさせられたが、何よりも作者の印象、見方も変わり、とてもよかったですという感想が大方のようでした。また、こんな作品に出会えればいいですね。

3月の読書会の案内

3月24日(土) 13:30 白樺コミセン

浅田次郎の「神座す山の物語」です。来れなかった方には、お届けします。